『比較民俗研究』13. 1996／3

納西族における橋の民俗

白　庚勝※

橋は東巴神話では常に伝えられている象徴的な記号である。『崇般図』には次のような神話がある。人類の始祖である“崇仁利恩”と“衬紅褒白命”が天界から人間界に降りた際に，海時繆阻湾から橋を渡って居那什羅神山の天辺に着いた。神山の頂上に立ち，三滴の聖水を山の両側につけた。こうすることによって，太陽と月とも更に輝いた。彼らはついに明るい道，穏やかな橋を見つけ，人間の大地にたどり着いた(1)。この神話の中の橋は天界と神山，神山と人間の間の連結物として現れるのである。

橋及び橋の役割を果たす「溜索」（滑るロープ訳者註）の来歴について『魯般魯饒』には生き生きとした内容が載せられている。大昔，一群の男女たちがもっと美しい大地を求めて故郷を離れた。途中，川や山峡にぶつかり，立ち往生となった。彼らは蟻，蝶々，蜘蛛などの行動を見て知恵をひねった。そして，ようやく天然の要害を制し，理想的な地を見つけた。

「村の後ろにある溝の側，蟻は頭がいいから，一つの大きい橋を架けた。橋を架けられないなら，蜘蛛に学びなさい。蝶々は藁草橋を架けた。橋を架けられないなら，蝶々に学びなさい。川沿いにある枯れ木の上に黒蜘蛛がいて，南から北へ，一生懸命網を編んでいる。九十人の若者が溜索を架けられない，蜘蛛に学びなさい。河南坡にある家の前に，三つ株の竹が生えている。誰が先に緑の竹を見つけるか。目が早い者が先に竹を見つけた。竹を切る刀がない，坡人犀利刀を買ってきた。三つ株の籐竹を切り倒し，竹の皮を剝き，溜索を作った。更に坡村のあたりへ行って，白樺樹を伐り，白樺の木で溜斗を作った。溜索を河の上に架け，対岸へ向かって滑っていけば，河は若い男女たちの邪魔にはならない」(2)。橋や溜索の来源は生物の行動をまねした結果と言われている。それで，起源神話というよりは伝説と言ったほうが適当である。

納西語では橋を“筰”（竹で作った橋訳者註）と称する。『太平寰宇記』巻八十には「筰，自漢書以下置州郡図籍，凡言筰者，即此土夷人于天水之上置藤為橋謂之筰，故曰邛筰」。ここに記された土夷人は漢，晋の時代の納西族先住民の摩挲（モソ）人を指し，筰は橋のことを指すが，地名を指す場合もある。あるいは筰の地に住む人々のことを指す場合もある。『史記西南夷列伝』には「蜀人司馬相如亦言西夷邛，筰可置郡」，また『後漢書』巻八十二には「南蛮西南夷列作之筰都夷者，武帝所開，以為定筰県」，『華陽国志』巻三十四には「定筰県，筰，筰夷也，……県在郡西，渡瀘水，賓剛徼，曰摩沙夷」などが記された。“筰都”或いは“定筰県”に関しては今の四川省塩源県であり，“摩沙”は“摩挲”の書き違いと考えられ，“筰都夷”或いは“筰夷”は筰都或いは定筰に住む“摩沙”のことを指す。

※中国社会科学院民族文学研究所副研究員

ではなぜこのような状況が生まれたのか。漢晋の時代に川西雅礱江，大渡河，岷江，金沙江流域で生活していた納西族先住民“摩沙”あるいは“摩挲”が，交通の便のために超的な氏族の社会を作るために，大自然の障害を乗り越えなければならないという状況があった。納西族及びそれに属している彝語の支民族の先住民たちは，川にたくさんの橋をかけ，峡谷の間に溜索を吊り下げ，絶壁に縄梯子をかけ，独特な橋の文化景観を作り出した。しかも，人類は険しい大自然に打ち勝ったという壮麗な歌を作り出した。地名は橋にちなんで名づけられ，人はその地名を誇りとした。橋の名前をもって地名をし，地名が人の代わりとなる現象が生じた。

隋唐の時代以降，納西族先住民“摩挲”たちの主な活動地域は滇西北へ移動した。『蛮書』巻四には「磨蛮，亦烏蛮種類也。鉄橋上下及大婆，小婆，三探覧，昆池等川，皆其所居之地也。……」。これらの地区は山の西部を横断し，多くの河流が広がっている。もっとも有名なのは玉龍雪山，哈巴雪山，梅嶺雪山，高黎貢山，怒江，瀾滄江，金沙江などで，橋を架け，溜索を作ることは交通の面にとって非常に重要であった。社会の生産力が発展し周辺の南詔，吐蕃政権が起こったことにより，この時代には納西族先住民たちの造橋技術が飛躍的に進歩し，橋の材料も竹藤から鉄に換わった。唐の時代摩挲人，漢族，チベット族，白族などの職人は現在の麗江県，維西県の県境に共同で“万里長江第一橋”— 鉄橋を架けることに成功した。この橋は雲南とチベットの政治，経済，文化の交流において重要な道となった。その後，南詔と吐蕃はそれぞれここで鉄橋節度と神川都督府を設置した。長期間の政権争いにより，戦争時は橋が切断されるが，講和時には橋を繋げ，友好の意を表す。

明，清の両時代には大型の橋の建設が進んだ。万暦十一年に木氏土司は今の維西県（“你那”）境内鉄索橋を造った。『木氏宦譜』には「又建立你那三巴丁鉄索橋，又修你那昭巷，又建巴托ト習城」。清代には永勝と麗江の間に架けられた鉄索橋 — 金龍橋は工程の規模が巨大し，すばらしい勢いであり，「麗江から永勝へ行く入口，滇蜀の間の交通の要路となる」(3)。中型の橋，小型の橋の建設は枚挙に暇がないほどである。麗江古城を例にあげると，2.5キロ平方メートル弱の土地に76の石造，木造の橋があり，平均各キロ平方メートルには30の橋が架けられ，橋の密度が一番高い蘇州に比べでも，遥かに高いと言える。なぜなら，蘇州城には21キロ平方メートルの土地に310の橋梁があり，平均各キロ平方メートルには15の橋しか架けられていない(4)。城近郊や遠い山村にも有名な石鼓鉄虹橋，格子澗虹橋，玉泉鎖翠橋，八和七星橋，東河青龍橋，宝山蓋爾橋，東圓橋，吉祥橋，桃花橋，溜水橋，丹陽橋などがある。これらの橋はそれぞれ特色があり，納西族地区の山川を更に美しく見せるほか，人々の生活を便利にした。民族文化の交流においては，民族の団結を強化し，社会の高度な組織化を促進すのに極めて重要な役割を果たした。

こうした理由に基づいている橋が納西族の民俗世界では記号化され，様々な儀式に使われ，豊かで複雑な文化意義を表する。遊魂を祭る儀式の際，東巴は鶏を使い，他所で亡くなった遊魂を家まで呼び，家で祭祀をする。それから，小麦粉で鶏の気管を塞いで死なせ，竹の薄い板で橋を作り，死者の霊魂を祖先の所へ送る。これはこの世とあの世が隔てられ，橋はそれを連絡するものであると人々が考えているからである(5)。それだけではなく，かつて納西族の家では母屋の

擎天柱（中心柱）には，必ず一つの神籠を掛けなければならない。この神籠の中には一つの石（“素魯”），梯子（“素勒吉”），橋（“素筰”），箭（“素里蘇”），旗（“素忒旗”）を入れる。石は家の神（素）の代わりで，梯子と橋は神の霊が人間の所に戻って来る時に渡れ，箭と旗は神の勢いを表すものである(6)。「大祭風」という儀礼の際に使われる橋は溜索である。しかも，祭祀の祭壇は川沿いに設置しなければならない。川の両側に松と山楸を一本ずつ植える。この二本の木の間に縄を結び，溜索とする。祭祀が一段落してから，東巴は象徴的に霊魂を溜索の向こうへ送る儀式を行う。これは要するに霊魂を順調に玉龍第三国（「十二久克坡」とも称する）にある境主“游祖阿祖”と“搆土西刮”の所へ送り，もはや社会や家庭の客でなく，この世に長く留まっていないように儀式するためのである。「祭風」儀礼でも同様の象徴的な儀式を行うが，溜索の向こう側へ送るのは供え物で送り先は“達勒阿薩命”所主の地とする(7)。従って，橋或いは溜索，または儀式に使われた梯子さえ，この世とあの世の間の媒介物として使われている。このつながりのパタン―は人と神，人と鬼，神と鬼，生と死，正常と異常などの間で付き合う可能性がある。

東巴神話に現れた橋の象徴は，まさに東巴儀式で行われた橋の象徴を言葉で語るものである。納西族の地域の自然環境は山や川が多いため，橋は人々の生活に欠かせない役割を果たしてきた。従って，多くの橋がかけられ，多くの橋文化が生まれた。厳しい自然環境でなければ，橋は納西族の信仰生活には現れないし，東巴神話にも重要な象徴記号として存在しないであろう。ところが，橋が象徴記号として現れるのはこれらの条件だけからではない。なぜなら，象徴記号は現実に存在するものではなく，濾過と抽象を経て，特定の観念と審美学的な意義が与えられたものである。この特定の観念というのは納西族東巴教にある二元（陰，陽）三際（天，地，人）の宇宙空間論である。この種の美学的意義は東巴文学全体に表現されている中和，非功利，開放などの統一性である。

橋が神界と人間界の間の媒介物となった例として，『崇仁利思解穢経』に「白い鉄製の犁を上に備え，神の位牌として，白麻布橋を敷いて，その上に緑柏の神門を架け，下に九つの穢の門と九つの穢の村落を立て，左右両側に九つの神木を備え……」とある。神界は“上”で，“下”の人間より優れる。しかも，“上”の世界が純潔であるため，神霊を引き渡すための橋も白色を使わなければならない。ここで引用した内容は主に穢れを取り除く儀式を行うもので，橋もすでに記号化された“白麻布橋”である。しかし，橋の持つ基本的意義と役割は全部含んでいる。

これに対して人間界と鬼界とは，全く接触がないわけではなく，互いに様々な食い違いや戦いがあるにもかかわらず，この両界を繋げるのも橋である。しかも黒い橋である。東巴神話には黒は悪，鬼，負け，醜い色を示しているため，黒い鬼界と接する時に使われる橋は言うまでもなく，黒色である。『史支俄示』には“含依精瑪神鳥”は鬼王“史支”の所へ“米短米温”の子の霊魂を捜しにいったという内容が描かれている。“含依精瑪神鳥”が“史支”の橋の門番に肉とにぎりめしをやり，鬼界の黒橋を通してもらい，“米短米温”の子を救う。彼は再び橋を通過し，その後速やかに黒橋を切断し，“米短米温”の子を人間界に連れ戻す(8)。黒橋を切断することは鬼が永遠に人間界にやってこないよう，また“史支”が二度と人の魂を奪わないようにという願

いを意味している。

神界と同じように祖霊がいる所は純潔で，従って，人間と祖霊の間に使われている橋は白い橋である。『迎接祖先』には「天地の間，神と鬼とも区別しにくい，祖先の目はあそこを見ないで，自分のよい男よい女の住まいに来てください，金の床，銀の床の上に降りてください。白い絨毯を敷いている神の座に降りてください，神の灯から降りてください」(9)と記されている。祖霊がいる所“余祖畢呂空，余遜吾托氏”には人間世界との間に十二本の川（三本或いは七本，九本を言うのもある）が隔てられ，橋を架けないと祖霊の所へ帰れないという。祖先を祭る儀式では，白麻布橋を架けることは祖霊を人間界に帰らせる過程を意味する。これはまた祭祀儀式で白い布を橋にしたり，“神路図”を掛け，死者の霊魂を祖霊の世界へ送る儀礼的象徴に相当する。この点について，次にもう少し詳しく述べてみたい。

違う境界の間を媒介する橋は，天の梯子や溜索などの形で東巴教の儀式や神話の中に現れている。天と地の間は垂直関係であるため，もともと横向きの橋は梯子の形に変わらなければならない。峡谷と峡谷の間は，橋を架けるのが不可能なので，溜索の形にした。ところが，形が変わってもその役割と象徴的な意味は同じである。記号と意味との関わりにおいて重要なのは「所指」と「能指」であり，記号自身とその違いではない。『迎請精如神』には“阿瓦拉瓦若”使者が鬼魔を降伏するため，天界へ“没卜精如神”を招きに行ったという記述がある。“阿瓦拉瓦若”使者はこの世に戻る際に「一本の太い金黄色の縄をゆっくり天から地までぶら下げた。銀色の長い梯子を天と地の間にかけ，梯子をつたってこの世に降りてきた。たくましいハリネズミを連れて天から降りてきた」(10)。境界間の縦と横を区別するため，梯子や橋の形に変わって，本質は変わっていない。ちなみに居那什羅神山は多くの場合には天の梯子のような役割を果たしている。十八層天界にある神霊が天から降りるときには神山を通過しなければならない。それに対して，この世の使者は天へ登るときにも神山を通過する。また，人類の祖先である“崇仁利恩”と“衬紅褒白”が大地へ来る際もこの山に沿って降りてきたのである。溜索に橋の代って異なる空間を結ぶ例は少ないだが，実際に存在している。前述したように愛情の楽園－玉龍第三国とこの世の間，風神“達勒阿薩命”とこの世の間の行き来するには溜索を頼るしかない。ところで神話中に現れた溜索は「“溜桶”は一番危険であり，東川，麗江ではよく見られる。両山間の距離は十数丈，川は激流で渡れず，橋を造るのは困難である。乗り物としては“溜桶”がある。両山の石に一本の太い縄を結び，桶に縄を貫く。人は桶の中に入り，矢のように滑りだし，途中で両手で縄をつかまえ，進む。馬も載せるという。万が一手が滑ったりでもしたら，一巻の終わりである」(11)。“溜桶”は溜索の上に人を載せる乗り物であり，その形は桶状であるため，その名がついたのである。

『拯救東巴什羅祖師記』は，東巴教教主“東（丁）巴什羅”がある災難に遭うが，最後に彼の三人の大弟子と三百六十の小弟子が彼の霊魂を毒海から救うという物語である。諸弟子は教主の遺体を毒海からすくい取った後，金黄色の神灯で遺体を照らし，白い麻布で橋を作り，彼の霊魂を神界へ戻せるようにした。その神界というのは彼の父“妥搆金補”と母“沙饒吉姆”がいる所

である。ここでは出てくる疑問は納西族東巴神話の中に語られる神霊，祖霊はなぜ別な橋ではなく，麻布橋を通るのか。これは東巴神話が東巴教道場儀式に使われる言葉と関わっているかもしれない。この問題をもっと明らかにするため，次に納西族の葬儀を見てみたい。麗江県魯甸県では，出棺日に「踩白橋」という儀式を行う。具体的な内容は以下の通りである。白い布の一端を棺桶の頭に結び，もう一端は二人で引き，棺桶を門の入口で跪まついている遺族の頭の上を過し，家の後ろに回って除穢壇を通す。それから，白い布を取り除き，棺桶を墓地へ埋葬し，或いは火葬する。この白い布は「白橋」といい，およそ10メートルあまりの長さがある。俗に「葬儀では“踩白橋”をすることが肝要だ」(12)という。この橋の持つ意味として，忘れてはならないのは，橋を通して神霊，祖先の世界へ行くことであり，新しい生命が始まり，新しい身分に変わることである。喇嘛教が納西族地域に伝播したことにより，多くの地域では「白橋」を行う儀式に使う素朴な白麻布或いは白布は，「神路図」によって代わられた。「神路図」の長さは15メートルあまりあるが，幅は僅か0.3メートルしかない。「神路」と称されているが，依然として「神橋」の原形である白布や白麻布を使っている。「神路図」の葬儀での役割は「白橋」とあまり変わらない。違いと言えば，「白橋」は白麻布或いは綿布であるが，「神路図」は白い布の上に天国，この世，地獄の三つの世界が描かれ，その中には，三百六十あまりの鬼怪，人物，神霊，神獣などが出てくる。出棺前は東巴の主拝により「指神路」という儀式を行わなければならない。この儀式は「神路」の一端を棺桶の頭につけ，もう一端は門の外まで引き伸ばし，六人の東巴が２～３メートルおきに「神路図」の側に立ち，自分に一番近い「神路図」に関する東巴経典を読む。東巴たちは，鬼神の道を開き，襲いかかる魔鬼と戦い，様々な審判と厳しい試練を経て，死者を無事に神仏の世界へ送り届ける。こうして死者は適切な時期に転生することができるのである。「踩白橋」「指神路」の儀式で白布や白麻布を用いて，“橋”や“路”を表すからこそ，東巴神話にも白布或いは白麻布の橋が現れるのであろう。

東巴神話の中の橋のほとんどは白麻布或いは白綿布が用いられるが，本物の橋を使う場合もある。例えば，前述した『魯般魯饒』の橋の起源に関する伝承は，本物の橋をモデルとして書かれたものである。『販馬』の物語には描かれた羅拉考橋は本物の橋をモデルにしたものである。この物語における三人の女主人公は貴族出身で，麗江，蘇羅，俄亞，永寧で寿命を買うのに失敗し，馬を引きながら，口拉都地方にある“羅拉考橋”を渡り，馬を南山に放して死亡の時間を待つ。羅拉考橋は東巴神話において生と死の境目として象徴されている。橋の一方では積極的に生を求め，もう一方では消極的に死の神を待つ。

このように，民俗世界では納西族の橋文化は比較的豊かと言える。例えば，子求めと橋・道作り，あの世と奈何橋，愛情婚姻と橋作り・橋渡り，橋直しと橋祭り，橋守りなどは民間において根強い信仰である。東巴神話では数多くの橋の形象が現れるが，その役割は単一化されている。すなわち，橋は違う空間と境目の間を繋ぐのである。東巴神話に現れた橋はすでに抽象され，象徴的な記号となっている。

東巴神話の中の橋は神の橋を白色，鬼の橋を黒色で表する二元性を持つほかに，「五方五色」

というのもある。東巴教の哲学によれば，東は白色，西は黒色，南は緑色，北は黄色，真ん中は雑色とされている。従って東西南北から中央に向かう橋はそれに応ずる色彩で表わされる。『迎接祖先』には，この原則に当てはまる内容が記されている。「白銀の線香，金黄色の神灯，三本の白い線香の上に一番偉い祖先を招き，白い麻布の神の橋の上から迎え，水碗竹橋の上から迎え，金橋，銀橋の上から迎え，緑松石橋，黒宝石の上から迎える。白鶴と緑宝石のようなほととぎすが迎えに来る，祖先に福，年，寿，吉，富を持ってきてくれるように祈る。この家族の人々に末永い幸福をもたらし永遠に見守ってもらえるように」(13)。この一節の金橋，銀橋，緑松石橋，黒宝石橋はそれぞれ東側にある白い橋，南側にある緑の橋，西側にある黒い橋，北側にある黄色の橋の代わりである。ここでは色彩された橋が現れるが，もし方向と色彩の関係によって，東巴神話の橋を分類するならば，金，銀，緑松石，黒宝石などの橋も存在していると思われやすい。ところで，文の中の「水碗竹橋の上から迎える」という表現は意味深い。ここの「水碗竹橋」は箸のことを指し，箸を橋と言うのは日本文化にも見られる。日本語の中の「箸」と「橋」の発音は同音であるだけではなく，語源もまったく同じである。

ここでは東巴儀礼及び納西族の民俗信仰に関する資料から，東巴神話に現れる橋の象徴性についてまとめてみたい。橋は象徴的な記号で，東巴神話の象徴体系に属している。他の象徴と違うのは，東巴教の哲学の二元三際宇宙論と結びついていることである。それは常に境目と境目の間に現れ，繋いで結ぶ，媒介の役割を果たしている。橋に伴って現れるのは使者或いは異なる世界の境界で変身した神霊，人間などである。東巴神話に現れる橋の象徴体には橋，梯子，溜索などがあり，それぞれは縦向き，横向き，神界，霊界，鬼界などの空間を表している。色彩においては神橋，祖霊橋を白で表し，鬼橋を黒色で表するが，方向で区別する際は，黒橋が神界を示す時もある。西側を表わす際，白橋が鬼界に現れる場合もあるが，東側が優位性を示しているわけではない。東巴神話の橋に現れる役割は，民俗世界における橋の象徴のように多彩ではない。しかも，宗教観念からの影響と東巴神話における審美観の洗礼を受けたため，比較的単一化，公式化された。東巴神話における橋の象徴性は，確かに納西族の社会に根差したものだが，多少は漢，藏族文化の影響を受けているのである。

註：

(1)和芳読経，周汝誠翻訳『崇般図』。

(2)楊樹興，和雲彩読経，和発源翻訳『魯般魯饒』。

(3)『重新金龍橋碑記』。

(4)李共久「麗江古橋梁概遷」載『麗江文史資料』第四輯，麗江県政協文史委員会編，1987年10月。

(5)和開祥口述，白庚勝『三個東巴的口述自伝』

(6)同(5)。

(7)同(5)。

(8)和即貴読経，牛耕勤翻訳『史支俄示』。

(9) 楊士興口述，和力民翻訳『迎接祖先』。
(10) 楊樹興読経，王世英翻訳『迎請精如神』。
(11) 『滇南見聞録』。
(12) 同(5)。
(13) 同(9)。

（翻訳者 筑波大学大学院地域研究研究科 蘇素卿）

調査余滴

『橋の民俗』

東河行政村龍泉村で村の古老から聞いた橋の話は次のようである。

村の中ほどの橋は明の万暦年間に建立され，青龍橋というが，出稼ぎで成功したギァという人が建てたので納西語ではギァゾウ（橋）と通称している。石材は龍潭寺の池から取ってきたもので，橋の南側には雄，北側には雌の獅子頭が彫られている。橋上にはかつて財神閣という楼閣が建っていた。二階建てで階下がアーチになっていて人が通った。正月の二日が祭りで，雌鶏を殺して橋の神，“趙公元師”に供える。この村は出稼ぎが多かったので商売繁昌を祈ったのである。

男子は結婚前は名前だけで，結婚後の正月二十日，“開字酒”といい，自ら酒・涼粉を作り，村の人を招待して姓を披露する。この時も“趙公元帥”にお参りした。結婚式のとき，橋を通るときは暴竹を鳴らす，また膝間づいて拝む。

求子祈願では小さな紙船を作り，龍泉から流し，青龍橋をうまく通過すれば子が授かるものだという。麗江市内には“望子橋”と呼ばれる子供の欲しい人が陰功功徳を積むために立てた橋がある。橋の横板の数が奇数なら男子，偶数なら女子を望んだものだという。道路と橋を壊す人は悪人である。子供が金持ちになるようにと“橋生”といい，橋の名前を付けることもあった。13歳までは正月の二日に供物を持っていき，膝間づいてお礼をしてくる。

葬式のとき，玄関を棺が出るとき“倒橋（ゾウ・イェ）”または“臥橋”といい参列者が膝間づいている上を通る。葬列は橋をかならず渡って墓地に行くものだとされるが，橋を渡るときには紙銭を橋の上で撒いたり，燃やす。孝子孝女は橋のところでは膝間づく。死者の体を拭いた布や使用した筵などは，男女の子供とも揃っている村で一番高齢の老婆を頼んできて橋の下で燃やす。

中元節には一枚一枚の紙銭で“紙銭橋（ジゾウ）”を玄関前に作り燃やす。この橋を渡って死者の国に行くという。あの世までの間には三つの河があり，黄金目水（ハシュミズギ）は船で，白金角水（ムハマズキ）は龍で，天地水（ムルシルキ）は橋で渡るものだという。

（佐野賢治）